

生誕 130 年没後 60 年を超えて須田国太郎の芸術 三つのまなざし

世田谷美術館（砧公園） 24.07.13～09.08

「須田国太郎」（1891～1961）は、「東西の絵画の総合」というテーマを追求し、骨太で生命感溢れる独自の油彩表現を拓き開いた画家で、昨年より愛知、大分、兵庫、広島を巡回し、今回東京・世田谷美術館での開催が最終となる。

本展は、約 10 年ぶりとなる大規模な催事で、油彩の代表作に加え、戦前の滞欧期に撮影した貴重な写真、また、能・狂言への造詣の深さを示すデッサン、長年にわたって蒐集した「グリコのおもちゃ」が公開されている。

〈展覧会の構成〉

- 第一章 画業の歩み 初期から絶筆までの代表作「約 30 点」。
- 第二章 旅でのまなざし 留学中に撮影した写真 50 点と油彩画作品。
- 第三章 幽玄へのまなざし 能・狂言の造詣の深さを示すデッサンなど。
- 第四章 真理へのまなざし 代表作《犬》等独特の黒色を基調の油彩画。「グリコのおもちゃ」は、蒐集品よる約 220 点」が展示されている。



須田国太郎 《犬》 1950 年

画伯の代表作で、背景の家並みを上から光線を当てて描き、前景の「犬」はやや青みを帯びた黒を塗り重ねて背景の光に対して大きく黒く浮き上がらせている。明暗による調子の変化を全く抑えて、ほとんどシルエットのように描かれた「犬」は、堅固なフォルムの中に深い情感をたたえて新鮮である。特に、犬の赤い目は堅固なフォルムの中に情感をたたえて新鮮である。



須田国太郎 《鶉》 1952 年

画伯の円熟した画境を示す代表作で、黒と白の鮮やかな対照を、単なる明暗に還元することなく、充実した色彩の諧調として表現している。

山陰を旅行してスケッチをしたこの作品は、一群の「鶉」の羽ばたきの間から眺められる風景が、強く黒白の対照を生んだものとされる。